

教師の幸福度

私は令和2年3月に39年間の教員生活を終えた。何を思ったか教員生活のまとめとして何かしよう、などと考えてしまった。考えたあげく、私を書いてきた学級通信などをまとめてみようと思うに至った。そこに至る思考回路は、なぜそうなったの今もって不思議だが、とにかくそう考えてしまったのである。

私は、すべての学級で通信類を出してきたわけではない。通信を出すようになったのは、30代後半からである。それでも学級通信、学年通信あわせれば、そこそこの分量になる。電子データは残っていたが、体裁を整えるのに案外時間がかかった。そうこうしているうちに、せっかくまとめたのだから、当時の子どもたちにプレゼントしたらどうか、と考えるようになった。当時の教え子が今は伊那中の保護者となり、何人かそばにいたので、こんなことを考えている、のような話をしたら、案外受けがよかったから、その気になってしまった。

印刷会社に勤めている教え子がいたので、冊子にしてもらうよう相談した。冊子にするとなると予想よりも大変な作業になってしまった。そしてめでたく3月に2校2クラスの教え子に送付を終えた。一つの区切りとしては、やり終えた感があった。そして、退職した。

何人かの教え子から、メールやら手紙やらをいただいた。当時を思い出して懐かしい、今人を指導する立場にあるが武田先生の気持ちが分かるようになった、中学生の頃はこんな純粋な気持ちでいたのに今の自分は…、などなど。そして、一気に読むのはもったいないので、毎日1ページずつ読んでいるという子も…。ありがたい限りである。私の思いつきで始めたことに、こんなに感謝されて恐縮である。

しかし、教師と教え子は、いつまでそういう関係なのだろうか。物理的には、あるいは社会的には、学校という仕組みの中で、学齢期の時代のみの関係なのだろうが、実はそうとばかりいえないのかもしれない。時間を超えて結びつきを持たせてもらっているとすれば、こんなにありがたい仕事はない。